

当たり前を疑う大切さ

中島 美緒

私は大学の夏季休業期間中にドットジェイピーという若者の投票率向上を目的に活動している NPO 団体のソーシャルインターンシップという制度を利用して、JFC ネットワークの東京事業部でインターンさせていただきました。私が JFC ネットワークでのインターンを希望した主な理由は、JFC 問題という社会問題に対し尽力されている NPO 団体の存在を知り、インターンを通じて活動させていただくことで、少しでも貢献をすることができたらと思ったからです。



JFC とは Japanese-Filipino Children の略称で、JFC 問題とは 1980 年代以降、バーやスナック、クラブなどで働くために日本に出稼ぎに来るフィリピン人女性の増加に伴い、日本人男性とフィリピン人女性の間にも生まれた、JFC と呼ばれる子どもの権利に関する問題です。JFC は父親の養育放棄による経済的問題、父に認知してもらえないことによるアイデンティティ危機などの精神的問題を抱えています。JFC ネットワークでは母親や JFC の依頼に応じて父親からの法的認知や養育費、日本国籍等を求める裁判での訴訟の実現に向けて、事情聴取や事務作業を通じて訴訟で用いる書類の作成、タガログ語や英語から日本語への翻訳、JFC や母親、父親、弁護士など関係する様々な人の仲介など、多様な活動がされています。私は主にフィリピンの現地で英語で書かれた書類を、日本語に翻訳する業務をしました。この書類は、母親や JFC の身分証明書の代わりとなる出生証明書や、両親の婚姻的証明書、家族の関係を示すための陳述書や JFC が父親に向けて書いた手紙やメールなど多岐に渡ります。そのうち、私が翻訳業務をする上で最も印象的だったのは、JFC から父親に宛てた手紙の内容です。この手紙では、自分を法的に認知してくれず、一度も会ったことのない父親に対して、健康を気遣ったうえで、大好きだよと述べられていました。私はこの手紙を読んで、JFC の父親への無邪気な愛情を感じ、胸を打たれました。

私は JFC ネットワークでの活動を通じて、「当たり前を疑う大切さ」を学ぶ良い機会を得られたと考えています。日本人の父親から生まれ、日本国籍を欲しているのにも関わらず、父親からの法的認知が得られないという理由で、日本国籍を得られない JFC の子どもたちがたくさんいます。この事実を知り、両親から自分が子どもだと法的に認められていて、国籍を持っているという、今まで当たり前だと思っていた私の境遇が、当たり前ではない方々がいるということに気づきました。そして、何かを「当たり前だと考えて生活する」ということは、それについて「何も考えずに生きていく」と同義だということに気づきました。世間には「他人事」という言葉があります。JFC 問題について「他人事」だと考えてしまえば、それまでです。しかし、世の中には誰かの助けを必要としている人は確かに存在していて、自分自身もまた、世の中の誰かに助けられながら生活しています。翻訳

業務を通じてJFCが抱える様々な事情を知ったことで、社会には様々な矛盾が生じていて、社会的マイノリティであるがゆえに様々な困難を感じている人々がいることを実感し、自分の視野が確実に広がったと思います。

また JFC ネットワークでのインターンの貴重な経験が、自分の将来のキャリアを考えるきっかけとなりました。社会は官公庁・民間企業・非営利団体の三つのセクターから構成されていますが、そのうちの一つである NPO 団体にインターンすることで、利益よりも社会貢献を目的に活動する方々の姿を間近で見て、感銘を受けました。競争を原理とし、少数派よりも多数派の意見を支持する民主主義社会において、個々人の事情に焦点をおいて支援を行う非営利団体は非常に重要な役割を果たしていると思いました。私は以前から漠然と国際的な社会問題に関心があり、将来何かできればと考えていたのですが、今回のインターンで実際にその一例である JFC 問題についての活動のお手伝いをさせていただき、刺激的な経験ができたと思います。

最後になりますが、インターンシップを通じて様々なことを教えて下さった東京事業部のスタッフの皆さん、インターン生の方々に心より感謝申し上げます。

インターンシップを経験して

竹之下 真緒

私は、今夏 JFC ネットワークでインターンに参加させて頂きました。

長らく社会人として企業に勤務していた私は、今年の夏、司法試験を受験した後、合格発表までの間、人生の夏休みといえる時間ができました。そんな折、尊敬する弁護士の方を通して JFC ネットワークの存在を知り、JFC の存在、抱える問題について頭では認識しているものの、実際の状況を知らなかったため、個別のケースにふれることができるまたとない機会だと思いインターンに応募しました。

日本人の（父）親の子どもとして出生しながら、両親が結婚していなかったり、外国で生まれたり様々な事情により日本国籍が認められない子どもたちがいること、そのことで生活の基盤、アイデンティティといった多くの問題に直面する多くの子どもたちの存在について、私は知識としては知っていても、一人ひとりの情報に接するたびに、それぞれのたくさんの人生の物語があることに心が動かされました。子どもたちが、生まれたときから成長していく様子なども写真や陳述書を通して、ありありと迫ってきました。自分自身を含めた多くの日本人は日本人の両



親のもと、日本国籍を有することに何らの疑問ももたず、特に意識することなく普段生活しているかと思います。しかし、JFC の子どもたちは、自らの努力では如何ともし難い国籍という問題を突きつけられる現実の厳しさに、改めて大人は何ができるのだろうと考えさせられました。

そして、インターンでの醍醐味は、そういった資料に直接触れて想いをめぐらすだけではなく、事務局の方々や他のインターンの方々との想いを共有し、子ども達への想いを口に出し、他の人達の考えを知ることができることにもあります。とにかく、皆さんとのおしゃべりが楽しくてついついしゃべりすぎちゃうなんてこともありながら、実際に支援を行っている現場の状況を知り、輪に入れていただき非常に有意義な体験となりました。

これからも、自分のできる形で、JFC の支援に携わっていきたいです。

里枝子さん、誉子さん、ご一緒させていただいた皆様、インターンとして温かく迎え入れて頂き、誠にありがとうございました。そして、今後ともどうぞよろしくお願い致します。

JFC サポートファンド報告

皆さまに別紙でお知らせしております通り、2021年4月1日にマリガヤハウスの日本人スタッフの河野尚子が急逝し、今後のマリガヤハウスの活動の見直しを迫られ、奨学生の見守りを含めた対応をしていくことが困難であるため、奨学金支援を終了することとなりました。これまで奨学生をご支援下さいまして本当にありがとうございました。みなさまのお陰で沢山の経済的に恵まれないJFCの奨学生の学ぶ機会が保障されました。心より感謝申し上げます。現在の奨学生3名については大学卒業まで支援が継続されますので随時ご報告いたします。今後は、奨学金に代わる基金として、JFC サポートファンドへの移行することとなりました。このファンドは困窮したJFCサポートのために使われます。

今回、ファンドからJFCの由規くんへ19,000ペソ（約44,000円）を支給しました。由規くんが18才の時にダバオのRGS-COWの事務所で相談を受けました。由規くんの希望はお父さんから認知されること、養育費支援をしてもらうこと、そして日本国籍を取得することでした。当時の国籍法では20歳までに認知を得て日本国籍取得の届出をしなければ日本国籍が取得できないため、直ぐに弁護士さんに受任して頂き認知訴訟を提起しました。2021年11月に第1回の期日が入りましたが、由規くんのお父さんは出頭しませんでした。しかし、裁判はその日で裁判を終結し、2週間後に判決の言い渡しがあり、認知が認められました。もともと弁護士さんから裁判所には20歳までに認知を得て日本国籍取得の届出をする必要があるので急いでいる旨を伝えていたのですが、こんなにも速攻で判決を出して下さるとは思ってもいませんでした。由規くんは「Yoshiki」の名前の色々な漢字の選択肢から「由規」を日本名に選びました。

養育費については、由規くんのお父さんが裁判所に出頭してないこと、お父さんの勤務先なども分からないため仮に養育費を定めた判決が出ても財産の差押えもできないことから請求を見送ることになりました。ただ一方で、由規くんからお父さんに手紙を出してみることになりました。由規くんは高校の成績がとてもよく（平均94.57点）、最優秀の学

MALIGAYA 2022.12.1

生として表彰されました。その表彰状も一緒に同封して送ってみることにしました。しかし返事はありませんでした。

2022年1月、ダバオのCOW事務所から報告が入りました。2021年12月、母が由規くん一人を置いて家出をしたというのです。母には多額の借金があることがわかりました。由規くんの19,000ペソの学費が未納のため成績証明書も学校から発行してもらえないとのことでした。成績証明書がないと大学に進学することができないそうです。更に、母は由規くんの名前を使い借金をしたそうで、借金取が由規くんのところに請求に来るようになったそうです。

母にも遺棄され一時は路頭に迷った由規くんは現在伯父からサポートをしてもらいながら生活していますが、伯父家族の生活も決して豊かではなく、由規くんの生活を支援するのに精一杯で未納の学費を支払うことまでは出来ません。そのため、由規くんは大学進学を諦め働くことを決めていました。

しかし成績優秀な由規くんが学費が未納だという理由で高校卒業資格を得られないのは由規くんの将来の可能性を狭めてしまいます。そこで由規くんの学費支援をサポートファンドから給付することをスタッフから提案し理事会で話し合い承認されました。

由規君は高校の学費を支払い、高校の成績証明書を受け取り高校卒業資格を得ました。由規くんは優秀なので奨学生としての応募も可能なのですが、大学に進学するためにはある程度のお金が必要なため、しばらくは働いて貯金をしたいと考えているそうです。

父には無視をされ続け、母からも遺棄された由規くんですが、RGS-COWのスタッフからのモラルサポートを得て、なんとか前向きに生きて行こうとしています。

みなさん、こんにちは。僕は由規です。みなさんからこのようなご支援を頂くことができたことに心から感謝致します。本当に嬉しくてこの喜びを十分な言葉にすることもできません。僕は心理学者になりたいです。他者の視点に立った人間とはどういうものかを知り、またその手助けをしたいと思っています。

